

表 2 EPF 新分類

	Classic	Immunosuppression associated	Atypical	
			Infancy-associated	EEDF
Complications	Eosinophilia (%)	HIV, malignancy, BMT	None	Varied
Pruritus	Yes	Yes	Yes	Yes
Distribution (reference 8 and 15)	- Face (88%), trunk (40%), extremities (26%), palms/soles (18%), scalp (11%)	- Face (67%), trunk (61%), extremities (11%), scalp (17%)	- Scalp (50-100%), rest of the body (50-65%)	- Dominantly face - Periorbital sparing
Clinical findings	- Sterile papulopustules - Centrifugal extension - Coalescence at periphery - Pigmentation	- Atypical plaques; erythematous or urticarial - Independent papulopustules	- Scattered papulopustules - Short duration	- Papulopustules or erythema - Possibly centrifugal - Pigmentation - Responsive to IND
Histology	- Infundibular spongiosis and vesicles with eosinophil-dominant infiltration - Eosinophilic infiltration in follicles and sebaceous glands	- Same as classic	- Not fully characterized	- Eosinophilic infiltration in follicles or sebaceous glands - Subcorneal eosinophilic pustules
Treatment	- nbUVB - Oral IND - Oral tranilast - Oral antibiotics - Oral cyclosporine - Topical tacrolimus	- nbUVB - Treatment of the complications - Same as classic	- Topical steroids - Oral antibiotics	- Same as classic

Table 1. Summary of EPF subtypes

Abbreviations: IND, indomethacin; EEDF, episodic eosinophilic dermatosis of the face; HIV, human immunodeficiency virus; BMT, bone marrow transplantation.

好酸球性膿疱性毛包炎の国内文献的検討

分担研究者 藤澤 章弘 京都大学医学研究科 皮膚科 助教
研究協力者 加藤 真弓 京都大学医学研究科 皮膚科

研究要旨

好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis; EPF)は、毛包周囲に無菌性の好酸球浸潤を認めるそう痒の強い難治性皮膚疾患の一つである。

本研究は、1980年から2010年にわたる30年間に、日本国内で報告されたEPFの症例を解析した。(1)日本国内では太藤が報告した古典型が最も多かった。

(2)海外での報告が多いHIV関連型は、日本国内でも漸増傾向にあった。(3)悪性腫瘍などを合併する免疫不全関連型の報告も漸増していた。(4)海外での報告が多い小児型は、日本国内報告例は4例にとどまった。

以上の結果は、EPFのそれぞれの型における発症機序の相違を反映している可能性があり、文献的な傾向の集計は、発症機序解明に寄与すると考えられた。またEPFの罹患率の高い日本において、小児型の報告例が少ないことの原因は、国内において小児型EPFは、EPFと認識されていない可能性が考えられた。または海外と国内では小児型の発症機序が異なる可能性が示唆された。

A. 研究目的

EPFの国内文献から、発症の傾向、病型による臨床症状や経過の相違などを詳細に検討し、EPFの病態発症機序の解明につなげることを、本研究の目的とする。

B. 研究方法

1980年から2010年までの30年間に本邦にて症例報告された好酸球性膿疱性毛包炎115例(会議録は除く)、また、同期間に海外にて症例報告された85文献(146症例)についてについて、

- ① Classic EPF、
- ② Immunosuppression-associated EPF、
- ③ Infancy-associated EPFの3型に分類し、それぞれについて、性別、初診時の年齢、皮疹の分布、末梢血中好酸球数、治療薬、治癒までの期間について調査を行った。

C. 研究結果

国内で症例報告された文献について、過去30年間で、好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis: EPF)の会議録を除く症例報告は115例であった。性別は、男性84例、女性31例であり男女比は3:1であった(図1)。初診時の年齢は4歳から76歳で、平均年齢は40.0歳であった。年齢別にみると20歳代が23人、30歳代が22人、40歳代が25人、50歳代が22人と、20~50歳代にほぼ均等に分布しており(図2)、平均年齢は男性42歳、女性33歳、全症例では平均40歳であった。

Classic EPFは95例であり、男性69例、女性26例であり男女比は3:1であった。初診時の年齢は20歳代が23人と最も多く、平均年齢は男性43歳、女性35歳で、全症例平均40歳であった。皮疹の特徴は浸潤を触れる紅斑局面とその辺縁または内部の毛包一致性丘疹または膿疱であり、

87%の症例で顔面に皮疹を認めた(図3)。末梢血中の5%以上の好酸球増多は74例に認められた。治療には55例でインドメタシン内服が使用され、うち約75%の症例では数日~1ヶ月のうちに症状が消退する傾向にあった。

Immunosuppression-associated EPFは16例で、男性13例、女性3例であった。そのうちHIV-associated EPFは8例、造血器悪性腫瘍に伴うEPFは5例、その他の悪性腫瘍に関連するものは3例であった。男女比は4:1で、発症平均年齢は45.4歳であった。皮疹の特徴は、classic EPFに比べ紅斑局面形成が少なく、孤立性の丘疹や膿疱を多く認める傾向にあり、また、顔面に皮疹を認めない症例が12%に認められた。末梢血中の5%以上の好酸球増多は14例に認められた。治療には7例でインドメタシン内服が使用され、うち有効例は5例であった。

Infancy-associated EPFは4例で、男児2名、女児2名であった。発症平均年齢は7歳で、4例中2例が頭部のみに皮疹を認めるという特徴があった。末梢血中の好酸球は4~9%までが3例であった。治療には2例にステロイド外用剤が使用され、2例とも有効であった。インドメタシン内服は1例に使用され有効であった(表1)。

D. 考察

EPFは、男性に優位に多く発症し、若年者に多い傾向がある。本邦ではclassic EPFの報告が圧倒的に多い。病理学的所見に毛包内好酸球浸潤を認める点で3型は一致していた。

Classic EPFでは紅斑局面を形成した辺縁に膿疱を有し顔面に皮疹を生じる症例が圧倒的に多い。一方、immunosuppression-associated EPFの皮疹は局面形成が少なく孤立性丘疹・膿疱を生じ、顔面に皮疹を認めない症例が比較的多かった。Infancy-associated EPFでは頭部に皮疹が生じやすく末梢血中好酸球増多が比較的軽いという相違があった。これらの相違から、3型での発症

機序の相違が臨床的な相違に表れている可能性があるかと推察した。

E. 結論

EPFの各型では、男女比率や臨床症状等に相違があることが判明した。これらの相違は、EPFのそれぞれの型における発症機序の相違を反映している可能性があり、文献的な傾向の集計は、発症機序解明に寄与すると考えられた。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

Katoh M, Nomura T, Miyachi Y, Kabashima K. Eosinophilic pustular folliculitis: A review of the Japanese published works. *J Dermatol*. Article first published online: 22 OCT 2012 | DOI: 10.1111/1346-8138.12008

図とその説明

図1：国内報告例における男女比率

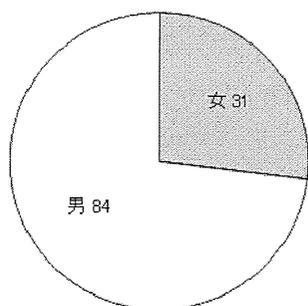


図2：国内報告例における年齢分布

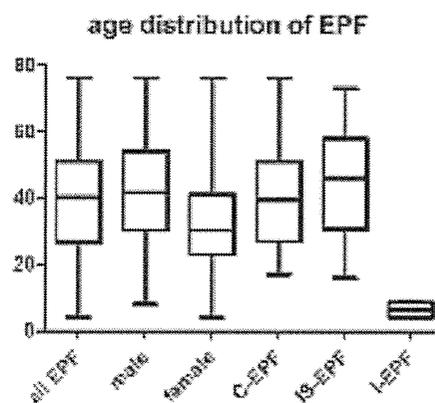
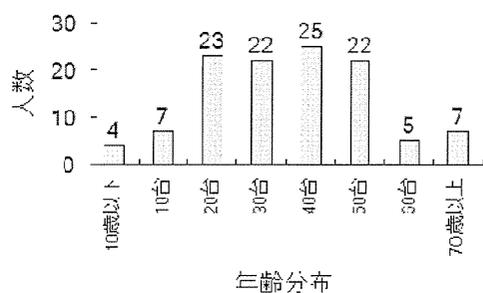
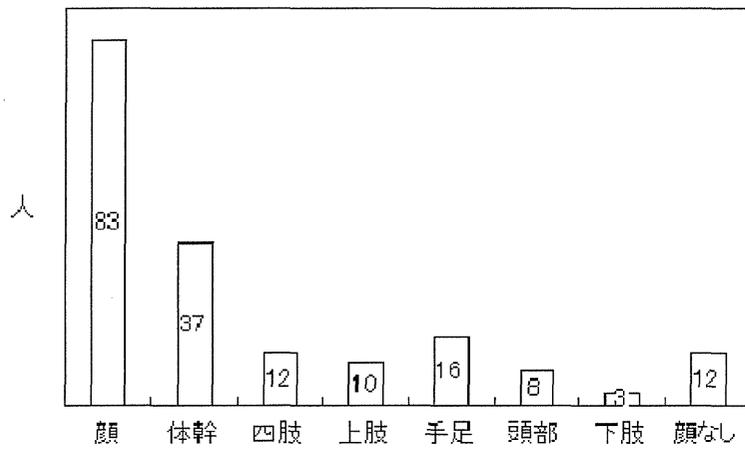


表1：国内報告例における病型

病型	(人)
古典型	95
免疫不全関連型	
HIV 関連型	8
血液疾患関連型	5
内蔵悪性腫瘍関連型	3
新生児型	4
総計	115

図3：国内報告例 classic EPF における皮疹分布



好酸球性膿疱性毛包炎の海外文献的検討

分担研究者 谷崎 英昭 京都大学医学研究科 非常勤講師
研究協力者 加藤 真弓 京都大学医学研究科 皮膚科

研究要旨

好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis; EPF)は、毛包周囲に無菌性の好酸球浸潤を認めるそう痒の強い難治性皮膚疾患の一つである。1970年に太藤が初めて報告して以来、症例報告数が蓄積している。本研究では、EPFの病態解明につなげる観点で、国外で報告されたEPF文献検討を継続した。

病理組織は、各型とも類似しているが、臨床的には発疹の出現部位に特徴があることがわかった。男女比については、国内よりも国外でやや女性例が多かった。小児型は、国外から多数報告されていた。一方国内は4例しか報告されていなかった。これらの相違は、EPFのそれぞれの型における発症機序の相違を反映している可能性があり、文献的な傾向の集計は、発症機序解明に寄与すると考えられた。

A. 研究目的

EPFの海外文献から、発症の傾向、病型による臨床症状や経過の相違などを詳細に検討し、EPFの病態発症機序の解明につなげることを、本研究の目的とする。

B. 研究方法

1980年から2010年までの30年間に本邦にて症例報告された好酸球性膿疱性毛包炎115例(会議録は除く)、また、同期間に海外にて症例報告された85文献(146症例)について、それぞれ、

- ① Classic EPF、
- ② Immunosuppression-associated EPF、
- ③ Infancy-associated EPFの3型に分類し、それぞれについて、性別、初診時の年齢、皮疹の分布、末梢血中好酸球数、治療薬、治癒までの期間について調査、比較検討を行った。

C. 研究結果

国内で症例報告された文献について、過去30年間で、好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis: EPF)の報告文献は85報(146症例)であった。性別は、男性103例、女性43例であり男女比は2.4:1であった(図1)。初診時の年齢は0歳から93歳で、平均年齢25.5歳であった。

Classic EPFは78例、男性44例、女性34例であり男女比は1.3:1であった。初診時の年齢は、12歳から93歳まで、平均年齢は男性39.2歳、女性30.7歳で、全症例平均36.2歳であった。皮疹の特徴は浸潤を触れる紅斑局面とその辺縁・内部の毛包一致性丘疹または膿疱であり、これは87.2%の症例に認めた。また、80.1%の症例で顔面に皮疹を認め、11.5%の症例で掌蹠に皮疹を認めた(図2)。痒みを伴う症例は66.7%であった。末梢血中の450個/ μ l以上の好酸球増多は52.6%例に認められた。治療には26例でインドメタシン内服が使用され、「有効」と判断された症例は80.1%であった。そのほか、タクロリムス軟膏は

11例で使用され、「有効」と判断された症例は63.3%であった。

Immunosuppression-associated EPFは36例で、男性29例、女性7例であった。そのうちHIV-associated EPFは27例、造血器悪性腫瘍に伴うEPFは8例、その他の悪性腫瘍に関連するものは1例であった。男女比は4.1:1で、発症平均年齢は男性35.4歳、女性43.5歳で、全症例平均37.8歳であった。皮疹の特徴は、classic EPFに比べ紅斑局面形成が少なく、孤立性の丘疹や膿疱を多く認める傾向にあり(77.8%)その傾向はとくにHIVに伴う症例に多かった(85.3%)。また、80.6%と高い確率で痒みを伴った。末梢血中の450個/ μ l以上の好酸球増多は77.8%の症例に認められた。治療の特徴としては、中波長紫外線(UVB)照射を施行した4例全てで有効とされた、という点である。

また、infancy-associated EPFは32例の報告があり、男児30例、女児2例で、男女比は15:1であった。発症平均年齢は1.2歳であるが、生後半年までの発症が46.9%であった。皮疹の性状は、局面形成する症例が28.1%、孤立性の膿疱や丘疹のみの症例が59.3%であり、78.2%の症例で頭部に皮疹を認めるという特徴があった。痒みを伴う症例は59.4%であった。末梢血中好酸球数増多は56.3%の症例で認めた。治療の特徴は、ステロイド外用剤が多く使用される点で、21例で使用され、81.0%の症例で「有効」と判断されていた。

D. 考察

EPFは、男性に優位に多く発症し、若年者に多い傾向がある。Classic EPFでは紅斑局面を形成した辺縁に膿疱を有し顔面に皮疹を生じる症例が圧倒的に多いという特徴があるのに対して、immunosuppression-associated EPFの皮疹は局面形成が少なく孤立性丘疹・膿疱を生じ、顔面に皮疹を認めない症例が比較的多く、infancy-associated EPFでは頭部に皮疹が生じやすく末梢血中好酸球増多が比較的軽いという相違があることが分かった。これらの相違から、

3型での発症機序の相違が臨床的な相違に表れている可能性があるかと推察する。

また、国内報告例に比べ、海外報告例ではclassic EPFにおける女性報告例が比較的多い傾向があった。

一方、immunosuppression-associated EPF、なかでもHIVに関連する症例報告が海外では多い。さらに治療に紫外線治療を比較的多用されていることが特徴的である。

なお、infancy-associated EPFの報告は、振り返って検討すると厳密にEPFと結論できない症例も含まれていた。今後の症例集積が待たれる。

E. 結論

EPFの各型では、男女比率や臨床症状等に相違がある。これらの相違は、EPFのそれぞれの型における発症機序の相違を反映している可能性があり、文献的な傾向の集計は、発症機序解明に寄与すると考えられた。

F. 健康危険情報

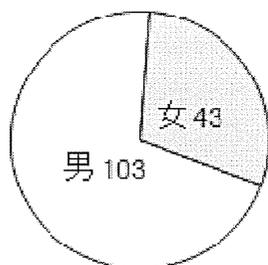
特になし。

G. 研究発表

Katoh M, Nomura T, Miyachi Y, Kabashima K. Eosinophilic pustular folliculitis: A review of the Japanese published works. *J Dermatol*. Article first published online: 22 OCT 2012 | DOI: 10.1111/1346-8138.12008

図とその説明

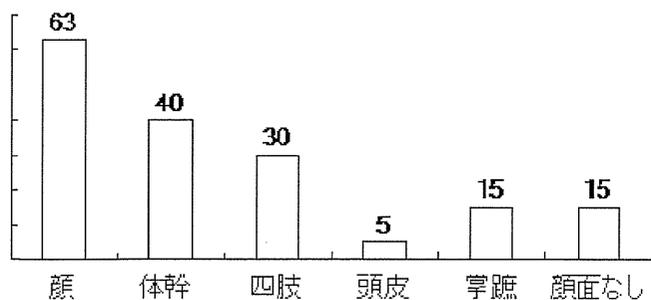
(図1) 海外報告例における男女比率



(表1) 海外報告例における病型

病型	(人)
古典型	78
免疫不全関連型	
HIV 関連型	27
血液疾患関連型	8
内蔵悪性腫瘍関連型	1
新生児型	32
総計	146

(図2) 海外報告例 classic EPF の皮疹分布



厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）
分担研究報告書

好酸球性膿疱性毛包炎 研究成果 インターネットを通じた情報の提供

分担研究者 遠藤雄一郎 京都大学大学院医学研究科 皮膚科学 助教
分担研究者 山本洋介 京都大学大学院医学研究科 医療疫学 講師

研究要旨

好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis; EPF)は、疫学調査が実施されておらず、疾患の実態ならびに診療実態の把握も不十分である。本研究班では、平成 22 年-24 年にかけて、過去の文献レビュー、ならびに主研修施設を対象とした EPF の診療実態に関する調査を実施した。最終的には、新病態分類の提言を行うに至った

本研究の活動と成果に基づき、EPF に関する、正確で新しい情報をインターネットを通じて積極的に発信することを計画した。

A. 背景

本研究班では、平成 22-24 年にかけて、好酸球性膿疱性毛包炎の研究を実施した。具体的には、過去の文献レビュー、ならびに主研修施設を対象とした EPF の診療実態に関する調査の実施、さらには、新病態分類の提言を行うに至った

この新たに得られた知見を、日本国内の皮膚科医を中心とする医師、医療関係者、さらには国民に広報する必要があるが、現在報告書による報告であり、十分な周知が行われているとは言えないのが実状である。

B. 目的

本研究の活動と成果に関する、正確で新しい情報をインターネットを通じて積極的に発信する事を目的とする。

C. 具体的な方法

ホームページを UMIN (大学病院医療情報ネットワーク = University Hospital Medical Information Network) に作成する。インターネットの特性を活かし、ホームページ利用者との双方向コミュニケーションを考慮した迅速かつ頻繁な情報提供に努める。具体的には、ホームページのコンテンツを一般人向けと医療関係者向けの 2 つに分ける。また、ホームページにそれぞれに向けたデータや資料をダウンロードできる機能を付加して、研究成果の普及に努める。を念頭に置いたコンテンツ作成を行う。一般人向けは、データを分かりやすく加工して解説したコンテンツの拡充を進める。

一般公開後は、適宜ホームページの構成とデザインの改訂を行い、わかりやすさ、見やすさと利用のしやすさについて向上を図る。

D. 期待される成果

web による公開により、好酸球性膿疱性毛包炎の周知が期待される。

さらには、正確な診断に寄与すると共に、本疾患患者に対して、特効薬であるインドメタシン使用へのタイムラグを減らすことにつながるものであると考える。

F. 結論

本研究の活動と成果に関して、正確で新しい情報をインターネットを通じて発信することを計画した。web による公開は、本研究の終了後も、EPF に関する双方向性のコンタクトを可能にする。今後の情報収集継続の意味でも、web による公開は有意義であると思われた。

G. 健康危険情報

特になし。

H. 研究発表

特になし。

I. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

該当せず

好酸球性膿疱性毛包炎の診療実態に関する研究（第3報）

分担研究者 山本洋介 京都大学大学院医学研究科 医療疫学 講師

研究要旨

好酸球性膿疱性毛包炎(eosinophilic pustular folliculitis; EPF)は、疫学調査が実施されておらず、症状に関する統計学的な記述も不十分である。平成22年度に、EPFの基礎的な疫学に関する施設別調査を実施した結果、インドメタシンの使用に関する実態が明らかとなった。しかしながら、病型分類のために必要な、性・年齢・部位などの個票に基づくデータの収集は未実施であった。そこで、本研究では、日本の皮膚科学会認定専門医主研修施設を対象に、個票に基づくEPF患者の調査を行った。本年は、昨年度実施した中間報告から新たにデータを追加したものを最終版として報告する。本研究の結果、今回EPFの性・年齢の分布、病変部位に関する個票に基づくデータが得られ、病型分類に資する結果となった。またインドメタシン奏効に関する要因もいくつか明らかとなり、今後の治療選択の一助となることが示唆された。

A. 研究の背景

好酸球性膿疱性毛包炎は、京都大学皮膚科教授であった太藤重夫博士が1970年に提唱した日本発の疾患概念であるが、本格的な疫学調査が実施されておらず、症状に関する統計学的な記述も不十分な実状があった。

そこで昨年度に、本研究班では、EPFの基本的な病型、症状、合併疾患などEPFの疫学に関する基礎的なデータの収集を行った。その結果、調査対象の施設においてはHIV陽性型のEPF患者が5%超を占めていること、また、従来論文によってその効果が指摘されてきたインドメタシン内服による治療が全患者の80%にも及ぶことが明らかとなった。しかしながら、昨年度の調査は、あくまでも暫定病型の割合、インドメタシン使用に関する情報を収集するための予備的な調査であり、性・年齢・病変部位・罹病期間などは個票に基づくデータの収集はなされていない。そこで、本年度は、昨年度から開始した、個票に基づく患者背景情報、EPFの個々の状態に関する情報を最終的に解析し、EPFの診療実態の把握やインドメタシン内服奏効に関連する要因を探索的に検討することで、病型分類策定の一助とすべく本研究を実施した。

B. 目的

本研究の目的は、EPFの病型分類の確定に向けEPF患者の性・年齢等の背景情報、病変に関わる情報、合併疾患、および薬剤の使用状況を含む診療実態に関する詳細なデータを収集し記述すること、ならびにインドメタシン内服奏効に関連す

る要因を探索的に検討することを目的とする。

C. 研究方法

i) 研究デザイン

横断研究

ii) 対象

2011年11月時点で、本邦の皮膚科学会認定専門医主研修施設の皮膚科外来を定期的に受診しているEPF患者を対象に調査を行った。なお、適格基準・除外基準は以下の通りである。

<適格基準>

以下の2点を共に満たす者を対象とした。

- EPFとの診断^{*}にて、当該施設を定期的に受診していること。
- 登録時からさかのぼって2年以内に直近の診察を受けていること。

※ 本研究でのEPFの定義

本研究では、a)主に毛包に一致した、癢痒を伴う丘疹・膿疱の集簇した紅斑状局面を形成する、b)皮膚病理組織検査にて、毛包脂腺周囲の好酸球および単核球の浸潤が確認される、以上2点全てを満たす症例をEPF確定診断例とした。

また、参考情報として、上記a)を満たすもののうち、医師の判断によりインドメタシン内服もしくは外用にて効果のみられた症例をEPF擬診例として収集した。

iii) サンプリング

2011年11月時点での、本邦の全皮膚科学会認定専門医主研修施設計101施設における、上記の適格基準を満たす連続症例とし、郵送法により研究対象施設に対し調査の依頼を行った。

iv) 主たる評価項目

EPFの病型分類に必要なデータとして、個人を単位として以下の項目を収集した。

- ・ 確定・疑診の別
- ・ 診療開始年月
- ・ 最終診療年月
- ・ 推定発症年月
- ・ 通院間隔
- ・ 前医の有無
- ・ 部位（被髪部・頭部・頸部・胸腹部・背部・上肢・手掌・下肢・足底）
- ・ HIV感染の有無
- ・ 現在の使用薬（ステロイド外用・抗真菌薬外用・抗真菌薬外用・タクロリムス外用・インドメタシン外用・インドメタシン内服・シクロスポリン内服・抗真菌薬内服（名称）・その他）
- ・ インドメタシン内服の効果（3段階）
- ・ インドメタシン外用の効果（3段階）
- ・ 抗真菌薬内服の効果（3段階）
- ・ ステロイド外用の効果（3段階）
- ・ 併存疾患（B型肝炎・C型肝炎・造血器腫瘍・糖尿病）

なお、インドメタシン内服の奏効に関する探索的検討においては、上記の評価項目のうち、性・年齢・HIV感染の有無を要因、インドメタシン内服の効果の有無を主たるアウトカムとして、その関連性を検討した。

v) 統計解析方法

性・年齢、および部位ごとの割合など背景情報の統計学的記述を行った。さらには、EPF患者に占めるHIV陽性例の割合、各種薬剤の使用に占める奏効の割合を記述した。

さらにはインドメタシン内服の奏効と上記に掲げた要因との関連性に関して、連続変数に関してはt検定を、2値変数に関してはフィッシャーの正確確率検定を用いて検定を行った。

なお、これらの統計解析にはStata11.2 (StataCorp11.2 LP, TX, USA)を使用した。

（倫理面への配慮）

本研究に関与する全てのものは「世界医師会ヘルシンキ宣言」および最新の「疫学研究に関する倫理指針」を遵守して研究を進めた。なお、本研

究は京都大学医の倫理委員会の承認（E-967）を得ている。

D. 結果

調査は、2011年10月に全施設に対して調査票一式の発送を行った。

2013年1月1日現在、回答を得られた施設数は65施設であった（回答割合64.4%）。

i) EPF患者の背景

本研究で最終的に解析対象となったEPFの患者数は145人であった（うち疑診例26人）。1施設当たりの平均患者数は2.2人、1施設当たりの最大患者数は19人であった。なお、12施設（18.4%）においては該当するEPF患者が存在しなかった。

対象のEPF患者の背景としては、平均年齢45.3歳、女性が49.3%であった。平均罹病期間は2.2年、医療機関への平均通院期間は1.7年であった。通院間隔としては、おおよそ月1回が44.6%で、72.4%の患者が皮膚科医からの紹介で来院していた。

合併・併存疾患に関しては、HIV陽性例は11.0%、HBV陽性例は3.4%であった。その他の背景に関する記述を表1に記した。

ii) EPFの罹患部位

被髪部・頭部・頸部・胸腹部・背部・上肢・手掌・下肢・足底に関する罹患部位の有無を複数選択も許容した上で回答してもらった結果、全患者の86.9%が顔に病変を有していた。次いで多かったのが胸腹部で22.8%の患者に病変が認められた。なお掌蹠に病変を認めた症例は、8.2%であった。

その他の罹患部位に関する記述を表2に記した（表2）。

iii) 薬剤の使用状況

対象のうち、インドメタシン内服を行ったことのある者は75.8%、ステロイド外用を行ったことのある者は61.3%、抗生剤内服を行ったことのある者は44.1%であった。

なお、インドメタシン内服の使用および奏効の状況に関しては、インドメタシン内服を行った者のうち31.0%が著効を示し、また84.9%が有効以上の効果を示した。

その他の薬剤の使用状況に関する記述を表3・4に記した（表3・4）。

iv) インドメタシン内服著効に関連する要因の探索

インドメタシン内服著効に関連する要因を探索的に検討した。具体的には著効例と無効～有効

例を2群に分け、性・年齢・HIV感染の有無の割合もしくは平均値を比較した。

その結果、年齢に関しては、両群で有らかな差は認められなかったが、性に関しては、著効に占める男性の割合は31.4%であるのに対し、無効～有効例に占める男性の割合は53.9%であった($p=0.04$)。また、HIV感染の有無に関しては、著効例に占める割合は2.9%、無効～有効例に占める割合は6.4%であったが、感染者数が少ないこともあり、有意な差は認められなかった。

E. 考察

本研究は、日本のEPFの診療実態に関して、疫学的手法を用いて調査を行った。昨年度の中間報告に引き続き、本年度は最終報告にあたる。なお、個票に基づく初めての疫学調査であり、詳細な診療実態が収集できたことは特筆すべきことであると思われる。実際、病型分類に必要な性・年齢、ならびに罹患部位に関する疫学的な情報は十分とは言えないものであった。今回、罹患部位に関しては詳細に質問を行ったことにより、全身の細部にわたる系統的なデータが得ることができた。

また、薬剤の実態に関しては、昨年調査において、インドメタシン内服による治療が全患者の80%にも及ぶことが明らかとなっている。本年の新規性としては、奏効の有無について、順序尺度を導入し、薬剤の有効性に関して3段階で評価を行った。その結果、インドメタシンが著効する対象を同定できたことで、今後の解析によってはインドメタシンが奏効しやすい対象の同定も可能になりうるものと思われる。

なお、本年度は新たに、インドメタシン内服の奏効に焦点をあて、どのような要因がインドメタシン内服の著効と関連しているかを検討した。年齢・HIV感染に関しては、インドメタシン奏効との間に明らかな関連性を認めなかったものの、男性と比較して女性である場合、インドメタシン内服の効果と関連があることが示唆された。今後の治療選択の一助となる知見であると思われる。

F. 結論

本年度の研究では、EPFにおける疫学調査第2報として、患者の個票に基づく調査を行った。本年度の結果は、病型分類の確定、並びに最適な治療法の探索に資するものと思われる。本年度のデータをさらに詳細に解析した上で、次年度以降も対象施設を拡大した調査を継続すべきであると思われる。

G. 健康危険情報

特になし。

H. 研究発表

1. 論文発表

1. Yamamoto Y, Nomura T, Kabashima K, Miyachi Y. Epidemiology of eosinophilic pustular folliculitis: results from a cross-sectional survey in Japan (submitted to British Journal of Dermatology)

I. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

該当せず

【表 1】背景、併存・合併疾患

		該当人数	回答人数
女性, %	49.3	71	144
年齢, 歳(標準偏差)	45.3 (15.5)	-	144
罹病期間, 年(標準偏差)	2.2 (3.2)	-	126
通院期間, 年(標準偏差)	1.7(2.8)	-	143
通院間隔:週に1回, %	6.4	9	141
通院間隔:2-3週に1回, %	17.0	24	141
通院間隔:月に1回, %	44.7	63	141
通院間隔:2-3カ月に1回以上, %	29.8	42	141
他の皮膚科での診療歴あり, %	72.4	105	145
皮膚科以外での診療歴あり, %	15.2	22	145
HIV 感染なし(確定), %	46.9	68	145
HIV-1 感染あり, %	9.7	14	145
HIV-2 感染あり, %	0.7	1	145
HIV(タイプ不問)感染あり, %	11.0	16	145
HIV の感染は不明, %	42.1	61	145
併存疾患;HBV, %	3.4	5	145
併存疾患;HCV, %	0	0	145
併存疾患;造血器疾患, %	2.0	3	145
併存疾患;糖尿病, %	1.4	2	145

【表 2】罹患部位

		該当人数	回答人数
部位:被髪部, %	7.6	11	145
部位:顔面, %	86.9	126	145
部位:頸部, %	8.3	12	145
部位:胸腹部, %	22.8	33	145
部位:背部, %	17.2	25	145
部位:上肢, %	15.9	23	145
部位:下肢, %	16.6	24	145
部位:掌蹠, %	8.3	12	145
うち手掌, %	7.6	11	145
うち足底, %	4.1	6	145

【表 3】薬剤の使用歴

		該当人数	回答人数
インドメタシン外用歴, %	37.9	55	145
インドメタシン内服歴, %	75.9	110	145
抗菌薬内服歴, %	44.1	64	145
ステロイド外用歴, %	61.4	89	145

【表 4】インドメタシン奏効の有無

インドメタシン奏効の有無		該当人数
無効	7.6%	7
有効	58.7 %	61
著効	33.7%	35
合計	100%	104

【Ⅲ】

平成 24 年度

研究成果の刊行に関する一覧表

(欧文)						
発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年	掲載
Nakahigashi K, Otsuka A, Miyachi Y, Kabashima K, Tanioka M.	A Case of Churg-Strauss Syndrome: Flow Cytometric Analysis of the Surface Activation Markers of Peripheral Eosinophils. Acta Derm Venereol	Acta Derm Venereol	93 (1)	100-1	2013	
Nakahigashi K, Otsuka A, Doi H, Tanaka S, Okajima Y, Niizeki H, Hirakiyama A, Miyachi Y, Kabashima K.	Prostaglandin E2 Increase in Pachydermoperiostosis Without 15-hydroprostaglandin Dehydrogenase Mutations.	Acta Derm Venereol.	93 (1)	118-9	2013	
Ono S, Otsuka A, Miyachi Y, Kabashima K.	No Basophil Infiltration in Alopecia Areata Irrespective of the Intensity of Eosinophil Infiltration.	Acta Derm Venereol.			2013	in press
Hara-Chikuma M, Chikuma S, Sugiyama Y, Kabashima K, Verkman AS, Inoue S, Miyachi Y	Chemokine-dependent T cell migration requires aquaporin-3 -mediated hydrogen peroxide uptake.	J Exp Med.	209 (10)	1743-52	2012	
Kabashima-Kubo R, Nakamura M, Sakabe J, Sugita K, Hino R, Mori T, Kobayashi M, Bito T, Kabashima K, Ogasawara K, Nomura Y, Nomura T, Akiyama M, Shimizu H, Tokura Y.	A group of atopic dermatitis without IgE elevation or barrier impairment shows a high Th1 frequency: possible immunological state of the intrinsic type.	J Dermatol Sci	67	37-43	2012	
Kashiwakura J, Okayama Y, Furue M, Kabashima K, Shimada S, Ra C, Siraganian RP, Kawakami Y, Kawakami T.	Most Highly Cytokinergic IgEs Have Polyreactivity to Autoantigens.	Allergy Asthma Immunol Res	4	332-40	2012	
Kayama T, Otsuka A, Miyachi Y, Kabashima K.	Improvement of anti-TNF α antibody-induced pustular psoriasis by azathioprine.	Eur J Dermatol.	22 (4)	565-6	2012	
Matsumura Y, Miyachi Y.	Atypical clinical appearance of eosinophilic pustular folliculitis of seborrheic areas of the face.	Eur J Dermatol.	22 (5)	658-62	2012	文献1
Nagao K, Kobayashi T, Moro K, Ohyama M, Adachi T, Kitashima DY, Ueha S, Horiuchi K, Tanizaki H, Kabashima K, Kubo A, Cho YH, Clausen BE, Matsushima K, Suematsu M, Furtado GC, Lira SA, Farber JM, Udey MC, Amagai M	Stress-induced production of chemokines by hair follicles regulates the trafficking of dendritic cells in skin.	Nat Immunol	13	744-52	2012	
Nagase H, Nakachi Y, Ishida K, Kiniwa M, Takeuchi S, Katayama I, Matsumoto Y, Furukawa Y, Morizane S, Kaneko S, Tokura Y, Takenaka M, Hatano Y, Miyachi Y	IL-4 and IL-12 Polymorphisms are Associated with Response to Suplatast Tosilate, a Th2 Cytokine Inhibitor, in Patients with Atopic Dermatitis.	The Open Dermatology Journal,	6	42-50	2012	
Nakahigashi K, Doi H, Otsuka A, Hirabayashi T, Murakami M, Urade Y, Tanizaki H, Egawa G, Miyachi Y, Kabashima K.	PGD(2) induces eotaxin-3 via PPAR γ from sebocytes: A possible pathogenesis of eosinophilic pustular folliculitis.	J Allergy Clin Immunol.	129 (2)	536-43	2012	文献2
Nakajima S, Igyártó BZ, Honda T, Egawa G, Otsuka A, Hara-Chikuma M, Watanabe N, Ziegler SF, Tomura M, Inaba K, Miyachi Y, Kaplan DH, Kabashima K.	Langerhans cells are critical in epicutaneous sensitization with protein antigen via thymic stromal lymphopoietin receptor signaling.	J Allergy Clin Immunol.	129 (4)	1048-55	2012	文献3
Otsuka A, Miyagawa-Hayashino A, Walls AF, Miyachi Y, Kabashima K.	Comparison of basophil infiltration into the skin between eosinophilic pustular folliculitis and neutrophilic folliculitis.	J Eur Acad Dermatol Venereol	26	527-9	2012	文献4

(和文)						
野村尚史、松村由美、梶島健治、宮地良樹	太藤病の病型	皮膚病診療	35 (2)	129-136	2013	文献5
佐藤 貴浩, 横関 博雄, 片山 一朗, 室田 浩之, 戸倉 新樹, 朴 紀央, 梶島 健治, 中溝 聡, 高森 建二, 塩原 哲夫, 三橋 善比古, 森田 栄伸	日本皮膚科学会ガイドライン 慢性痒疹診療ガイドライン	日本皮膚科学会雑誌	122巻1号	1-16	2012	
佐藤 貴浩, 横関 博雄, 片山 一朗, 室田 浩之, 戸倉 新樹, 朴 紀央, 梶島 健治, 中溝 聡, 高森 建二, 塩原 哲夫, 三橋 善比古, 森田 栄伸	日本皮膚科学会ガイドライン 汎発性皮膚そう痒症診療ガイドライン	日本皮膚科学会雑誌	122巻2号	267-280	2012	

辻花光次郎, 鬼頭昭彦, 十一英子	インフリキシマブ投与により掌蹠膿疱症様皮疹と脱毛を生じた例	皮膚病診療	34 (5)	457-460	2012	
栞島健治	【慢性痒疹と皮膚そう痒症の病態と治療】 慢性痒疹・皮膚そう痒症の病態と発症機序	アレルギー・免疫	19巻6号	902-906	2012	
中東恭子, 栞島健治	【最近のトピックス2012 Clinical Dermatology 2012】 皮膚疾患の病態 好酸球性膿疱性毛包炎 最近の病態研究	臨床皮膚科	66巻5号	44-48	2012	

平成24年度 単行本

(和文)								
著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年	掲載
宮地良樹	皮膚科サブスペシャリティーシリーズ	塩原哲夫、宮地良樹、清水 宏 (編)	一冊でわかる皮膚アレルギー	文光堂	東京		2012	
宮地良樹	思春期後ざ瘡の診断と治療	宮地良樹 (編)	女性の皮膚トラブルFAQ、	診断と治療社	東京	230-232	2012	
戸倉新樹	外因性アトピー性皮膚炎と内因性アトピー性皮膚炎.	塩原哲夫	一冊でわかる皮膚アレルギー	文光堂	東京	125-126	2012	
戸倉新樹	全身の潮紅と落屑 (紅皮症) をきたす疾患 Diseases presenting with generalized diffusescaly erythema (rethroderma).	塩原哲夫	今日の皮膚疾患治療指針 第4版	医学書院	東京	41-43	2012	

(欧文)								
著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年	掲載

【IV】

研究成果の刊行物・別刷

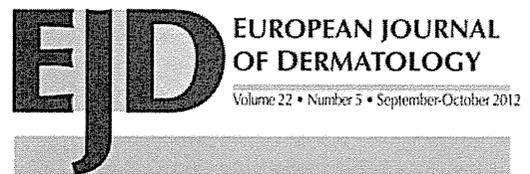


L'essentiel de l'information
scientifique et médicale

www.jle.com

Le sommaire de ce numéro

<http://www.john-libbey-eurotext.fr/fr/revues/medecine/ejd/sommaire.md?type=text.html>



Volume 22 • Number 5 • September-October 2012

REVIEW ARTICLES	Not YAG laser in acne keloidalis nuchae Amel M. Lomfi, Karim M. Alkhatib et al.
Cosmetic procedure learning in real life of Lebanese doctors	
Psoriasis pigment disorders of the skin Dimitris S.C. Kircanski, Eva Theodoropoulou et al.	CLINICAL REPORTS
Skin symptoms of ED Evan Karad, Theodoros et al.	Candidosis cryptococcosis after solid organ transplantation Christos Hatzioyi, Ioana Ruzoiu et al.
INVESTIGATIVE REPORTS	Unusual clinical course of dermatomyositis with antibodies for TIF1-γ E. Schmidt, Tobias Holzner et al.
Severe skin reaction after TCA peeling in TBPV1-deficient mice Thang J. Hui, Nelson K. Lomax et al.	Prevalence of Psoriasis in China Xiaoliang Ding, Tingting Wang et al.
PPARγ and metabolic syndrome in psoriasis Sofia A. Tzirogi, Karim M. Alkhatib et al.	Atypical eosinophilic pustular folliculitis Sara Alshammari, Sarah Alshammari
Mice in Subcutaneous Tryptophan via Lipid Profound Santosh K. Gupta et al.	Marital status in dermatological diseases Nesreen Lakhal, Laurence Pignatelli et al.
hBD2 and psoriasis, two new targets of skin psoriasis Eman Hammad, Galina Chernozhuk et al.	CORRESPONDENCE
THERAPY	RESIDENTS' CORNER
Infliximab in the treatment of hidradenitis suppurativa E. Al-Najar, Tarek Al-Najar et al.	

www.john-libbey-eurotext.fr/fr/revues/medecine/ejd/sommaire.md?type=text.html



ISSN 1157-1222



Montrouge, le 11/05/2012

Yumi Matsumura

Vous trouverez ci-après le tiré à part de votre article au format électronique (pdf) :

Atypical clinical appearance of eosinophilic pustular folliculitis of seborrheic areas of the face

paru dans

European Journal of Dermatology, 2012, Volume 22, Numéro 5

John Libbey Eurotext

Ce tiré à part numérique vous est délivré pour votre propre usage et ne peut être transmis à des tiers qu'à des fins de recherches personnelles ou scientifiques. En aucun cas, il ne doit faire l'objet d'une distribution ou d'une utilisation promotionnelle, commerciale ou publicitaire.

Tous droits de reproduction, d'adaptation, de traduction et de diffusion réservés pour tous pays.

© John Libbey Eurotext, 2012